

第二講 人は何故過去を記憶し、記録しようとするのか？

レポート講評

課題 1：文化とは何か。

経済的合理主義の説明に終始したり、日本人論になってしまったりしているレポートが多かった。例えば後者の場合、サッカー競技場を清掃して立ち去っていく日本人論となってしまうている。文化と行動（行為）の関係性について触れずに、日本人の行動の特異性を説明しているレポートが見られた。チップの件もそうだ。日本にチップの習慣がなかったので、チップを受け取らないのだ、と書いている人もいる。でも日本にも「心付け」という習慣があり、仲居さんや女中さんに心付けを渡すことがある。これはこれから宜しくという意味が込められている。

また個人のレベルで議論が終わっているレポートもあった。つまり育ってきた環境や教育が個人の行動（行為）に影響を及ぼしているという風にレポートしている。ここでは個人ではなくエスニックというような大きな集団の次元で問題を考えるように提示しているので論点はずれている。その結果、個人の資質が行動に影響を及ぼしているという議論すら出てきている。

例示した経済的合理主義だけではなく、文化的環境を取り上げているレポートもあった。つまり個人が集団の中で共有している文化的環境が集団への帰属意識（自己アイデンティティ）の一部を形成していると指摘しているレポートがあった。これは非常に良い指摘だと評価できる。

それからさらに一歩進め人間を文化的存在と規定し、その文化を共有する集団と異質な文化を共有する集団との差別化、自己同定化が行われると指摘しているレポートもあった。差別化とは文化の優劣を求めるのではなく、自文化の個性化と限界を意識することにつながるというものである。そのような考察から同じ環境に置かれても人々の行動はそれぞれの文化的価値によって異なってくるという行動パターンの多様性に言及するレポートもあった。

課題 2 ノブゴロド公国やキエフ公国についての教科書の記述の問題点

このレポート課題は昨年も取り上げており、昨年の講評でその目的を概略的に述べている。今一度昨年の記述を挙げておく。

「現代の文化史学や歴史学の大きな問題はレンズとしての国民国家や民族への懐疑と批判があることに注意することが求められている。国民史、民族史として過去をまとめて来た近代歴史学や文化史学の有効性を考え直していくことが求められている。ウ

クライナの問題や東アジアや東南アジアでの領土や海洋権益をめぐる紛争・軋轢は近代の産物である国民国家の人為性、国家への統合装置と化した民族意識、プロパガンダ化した民族主義の排他主義を露呈させている。国民国家や民族という枠組みは時代遅れなのか、それとも今なお人々を拘束し続ける有効な概念なのか、そのことを考えて欲しかった。」

イギリスやフランスなど西欧諸国の歴史が重要視され、ロシアを除く東欧諸国の歴史があまり扱われないことへの問題点を指摘するレポートがあった。確かに日本の世界史が西欧と米国重視の傾向があること、東欧や、それ以上にアフリカ、太平洋諸国の扱いが断片的で軽いという問題がある。それは明治以降の日本の国家戦略と密接に結びついているのだろうと思われる。明治以降、日本はイギリスやフランスなどの西欧諸国やアメリカの文化や経済をキャッチ・アップすることを国是としてきたし、これらとの関係を育成し濃密化することを追求してきたからである。その意味で歴史は公平性を欠くというのは当たっている。

スウェーデン系ノルマン人が移住する以前から住んでいた住民集団への記述がないというレポートやノブゴロド公国やキエフ公国が建国された理由が分からないというレポートがあった。これは次のスラブ化と共通するがいきなり歴史用語が登場して十分理解できないまま歴史教育が行われている状況への問題点の指摘であったと評価できよう。

スウェーデン系ノルマン人のスラブ化という教科書の記述に疑問を向けるレポートは多かった。とくにスラブ化とは何か、その説明を抜きにしてスラブ化という用語が使われていると。あるいは何故スウェーデン系ノルマン人のスラブ化が重要なのかという疑問を挟むレポートもあった。というのはその地にはホストとしてすでに多くの東スラブ人が住んでおり、ゲストとしてやって来た人々のスラブ化が重要だというのは不自然ではないか、というものである。

本来、明確にロシア人とかウクライナ人とか分けることが難しい地に住んでいた人々をロシア人とかウクライナ人という風に区別して書いている点に問題があるというレポートがあった。この背景にはロシア人を選別し、そのロシア人を外国人のように扱い、異質化しようとする態度が見られる、と。

スウェーデンやロシアといった国民国家が成立する以前の時代にスウェーデン人とかロシア人とか国民名を使用することの妥当性に疑問を向けるレポートがあった。それにキエフ公国をロシアの中に位置づけることに対する疑問もあった。国民国家成立後の近代の民族や国家の観念を過去にさかのぼって適用するということは良いのか、とい

う疑問は大事だと思う。ある意味それは近代歴史学の問題ではある。さらに現ウクライナの首都であるキエフをロシアの歴史的都市として扱うのに問題はないのかというレポートもあった。

キエフをロシアという空間の中に位置付ける教科書の記述はたしかに民族国家の枠組みの中で歴史を叙述する近代歴史学の基本に相反する。さらに言えばスウェーデンという国民国家が出現する以前のスカンディナビア半島出身のノルマン人にスウェーデン系と名付けるのもおかしなことではある。

以上のレポートを通して、歴史学には軸がない。あるのは取り換えられていくパラダイムとパラダイムの束だけだということが明らかになってくる。しかし文化史学の現状に問題がないのか、という疑問も浮かび上がってくる。文化史学のパラダイムが全く意識されていない。その為文化史学にはパラダイムがないのか。あるのは個々の研究者が取り扱っている個別の分野だけだ、ということに落ち着くのか。求められているのは文化史学の包括性・全体性を主張する枠組みと方法ではないのか。同じように包括性・全体性を自明の前提としている歴史学もその個性を鮮明にしていく必要がある。それらを曖昧にしたまま過去と対峙しても広がりを持たず、長続きしない文化史像・歴史像を再生産し続けることになりはしないか。

レポートへの導入：アッピア街道沿いの富裕な解放奴隷の墓と墓碑
忘却への恐怖と永遠への願望、第三者への訴え

【本日のレポート】

人は何故過去を記憶し、記録するのか？

記憶と歴史

記憶と歴史は相反するのか？

歴史とは：・人間の営為を記録し後世に伝える（ヘロドトス）

偉大な業績が忘れ去られていくことから救うため

忘却（自然）に抗して記憶（人為）しようとする意志

永遠に対する挑戦

記録・記憶に残すという行為

意図して残すもの：日記・切り抜きファイルなど

意図せずして残ってしまうもの：携帯の着信記録など

記憶の問題

・記録される記憶の場の問題

どこに記憶されるのか？

記念碑：過去と現在を結ぶ。記憶を構築していく。

何に記憶されるのか？

マラトンのトロパイオン・・・

現在マラトン国立博物館所蔵

イオニア式の柱（溝なし）

柱頭にニケ像

マラトンのソロス・・・192名の戦死者

英雄神として祭典を挙げる

ヘロドトスの『歴史』6巻での記述

現代での再生

ミルティアデスの彫像

近代オリンピック競技のマラソン

エウクレス（またはフェイディッピデス）が完全武装のままアテナイに走り、「我ら勝てり」と告げて絶命したという伝承に基づく

TV番組（Decisive Battles - Episode 4 - Marathon, 490 B.C.）

現地の情景、レポーター、コンピュータグラフィックによる再現、ポール・カートリッジやハンス・ファン・ウィースらの歴史家のインタビュー

コリント式のかぶとを着用、騎兵部隊の展開

当時存在していないエレクトイオン神殿、パルテノン神殿

完全装備で駆け足突撃（80メートルが限界！）

スコイニア浜の海岸線の変化

2011年のセレモニー（<http://youtu.be/YaOJ48Dyomg>）

6名のペルシア兵、44名のアテナイ兵

戦勝記念柱の前での儀式

スコイニア浜での模擬戦（水泳客の前で）

記念碑：過去と現在をつなぐ媒介項

世界史の教科書での記述

